

自分はどこから流れてきて、どこへ向かおうとしているのか、またそれはなぜか。人は皆、死ぬまでにその答えを見つける努力をすべきである。

— ジェイムズ・サーバー

私たちはそれぞれ心の奥底では、何かを成し遂げたい、すなわち貢献したいと思っている。これを「大義」と呼ぶにしても、「ミッション」と呼ぶにしても、要するに何か意味のあることに関わりたいということだ。しかし、自分はどんな貢献ができるか、日々模索することは必ずしも簡単なことではない。雑事に追われているときは特にそうだろう。それでも、自分にはどのような価値があるか、どんな目的を追求するか、各人が明確にしなければならぬ時点がいつか訪れるものだ。

これから紹介するストーリーは、人生の岐路に差し掛かった三人の人たちに関するものである。前向きな生き方をして積極的に貢献するか、あるいは受身的な生き方でじっとしているか、それぞれが決断を迫られたストーリーだ。一つ目は、ジョン・ベイカーという名前の若者の話だ。オリンピック出場を目指す有能なランナーであるジョンの、意義と貢献に対する意識がこれまでになく試される。彼がどんな行動を選択し、どのような目的を追求することにしたか読みながら、あなたはこれからの数週間、数カ月、さらには数年間をどう生きるつもりか、どんな貢献をしたいと思うか考えてほしい。

## ジョン・ベイカーの最後のレース

ウィリアム・J・ブキャナン

一九六九年春、二四歳のジョン・ベイカーにとって未来はバラ色に見えた。陸上競技の男子一六〇〇m走の世界最速ランナーの一人とスポーツ記者の称賛を浴び、目覚ましい競技歴の頂点にあった彼は、自分の夢は一九七二年オリンピック大会の米国代表になることと決めていた。

子どもの頃のベイカーは、こんな一流選手の片鱗は何えなかった。華奢な体格で、身長もアルバカーキ（ニューメキシコ州の都市）の十代の友だちと比べても数センチ低く、高校でトラック競技をするには「あまりにも不向き」と思われていた。ところが、彼がジュニアだった年、彼の人生を変えるような出来事が起きた。

マンザノ高校で陸上部の監督をしていたビル・ウォルフアースはしばらく前から、ジョン・ハーランドという長身の有望なランナーに目をつけ、陸上部に入るよう誘っていた。ハーランドはこれを断った。そんな時、彼の親友だったベイカーが申し出た。「僕を入れてくれませんか。そうすればハーランドも入るか

もしれませんよ」ウォルファースはこの案に乗り、この作戦は見事に的中した。ジョン・ベイカーはこうしてランナーの仲間入りを果たしたのだった。

## 溢れ出すエネルギー

その年の最初の大会は、アルバカーキの東の山麓を走る三キロメートル弱のクロスカントリーレースだった。大方の目は、アルバカーキのチャンピオンに君臨するロイド・ゴフに向けられた。号砲一発、競技者たちが予想通り列を成して走り出した。ゴフが先頭に立ち、ハーランドはその後につけた。四分ほど経過した頃、ランナーたちは、折り返し地点のある低い丘の陰に一人ずつ姿を消していった。それから一分が過ぎた。そして、二分。そのとき、一人だけ姿が見えた。ウォルファース監督はアシスタントをついた。「ゴフが来たぞ」彼はそう言った。そして、双眼鏡を取り上げて覗き込んだ。「何てこった！」彼は叫んだ。「ゴフじゃないぞ。あれはベイカーじゃないか！」

あつけに取られているランナーたちの一団をはるか後方に置き去り、ベイカーは一人悠々とゴールした。彼のタイム、八分〇三秒五は大会新記録だった。

丘の向こう側で何が起きたのだろうか。ベイカーは後にこう説明している。レースの中期まで、ずっと後のほうを走っていた彼は、「お前は最善を尽くしているか」と自分自身に問いかけた。彼は答えられなかった。それで、自分のすぐ前を走るランナーに視線を集中し、他のことはすべて頭の中から追い払った。たった一つのこと重要だった——目の前の走者に追いつき追い越したら、さらにその前のランナーを追いかける。それまで気づきもしなかったエネルギーが体中に溢れてきた。「まるで催眠術にかかったみたいだ

った」ベイカーは振り返る。彼は前の走者を一人ずつ追い越していった。筋肉が引き裂かれんばかりの疲労をもとめせず、凄まじいペースを維持した。ゴールインしたときは、疲れ果てて倒れ込んでしまった程だった。

彼のこの勝利はまぐれだったのだろうか。シーズンが進むにつれ、ウォルファース監督はベイカーをいろいろな大会に出場させたが、毎回同様の結果を記録した。謙虚で陽気な十代の若者が、ひとたびトラックに立つと勇猛果敢な競技者へと変身した。ベイカーは二年の終わりまでに陸上の州記録を六つ塗り替え、最終学年には州が生んだ最高の一六〇〇メートルランナーと称されるまでになった。まだ一八歳にもなっていない時のことだった。

## 「番狂わせジョン」

一九六二年秋、アルバカーキにあるニューメキシコ大学に入学したベイカーは、トレーニングをさらにステップアップさせた。毎日早朝、街中の通りや公園、ゴルフコースを走った。噛みついてくる犬を撃退するスプレー缶を手には、一日四〇キロも。この訓練が結果をもたらした。「番狂わせジョン」ベイカーはまもなく、ニューメキシコ大学ロボスが出場したアビリン、タルサ、ソルトレークシティーなどでの大会で本命選手を次々と蹴散らし、解説者を困らせた。

ベイカーが三年生だった一九六五年春、全米の大学陸上界で最も恐れられていたのは南カリフォルニア大トロージャンズだった。強豪トロージャンズが対抗戦でアルバカーキを訪れたとき、スポーツキャスターたちは当然のようにロボスの敗北と、マイルレースは南カリフォルニア大の「ビッグスリー」、クリス・

ジョンソン、ダグ・カルフーン、ブルース・ベスの三選手が三位までを独占するだろう、と予想した。三人ともベイカーのタイムを上回っていたからだ。

ベイカーは一周目でトップに立ったが、その後はわざとペースを落として四位に後退した。カルフーンとベスは困惑し、不安な顔でリードを奪い返した。もう一人のジョンソンは慎重に力をセーブしていた。三周目の折り返しで、ベイカーとジョンソンが同時に首位の座に躍り出ようとした。ベイカーがペースを落とし、必死に体勢を立て直そうとしている間にジョンソンが先頭に立った。残り三〇〇メートルほどの地点で、ベイカーはラストスパートをかけた。まずベス、続いてカルフーンを抜き去った。最後の折り返し地点ではジョンソンとベイカーのつばぜり合いとなったが、ベイカーが少しづつ前に出た。そして、両手を高く掲げ、勝利のVサインをしながらテープを切った。三秒差の勝利だった。ベイカーの勝利で勢いづいたロボスはその後の全競技で圧勝した。一方、戦意を喪失したトロージャンズは、過去六五年間で三番目の惨敗を喫したのだった。

## 親身になってくれるコーチ

ベイカーは卒業に際し、どの道に進むべきか、いくつかの選択肢を検討した。大学の監督就任の話ももらったが、子どもたちを相手にする仕事に就きたいと前々から思っていた。また、ランナーとしての夢もあった。自分にはオリンピック選手になるだけの力があるか――彼はそう自問した。結局、両方の夢を追求できそうな仕事を選んだ。アルバカーキのアспен小学校でコーチをしながら、一九七二年大会を目指して厳しいトレーニングを再開したのだった。

アспенでは、ベイカーの別の一面が顔をのぞかせた。彼の指導する場にスターという存在はなく、能力がないからといって責めたりもしなかった。彼が唯一求めたのは、子ども一人ひとりが全力を尽くすことだった。こうした公平な態度に加え、生徒たちの幸せを願う真摯な気持ち力が強い反応を引き出した。最初は不満としてベイカーにぶつけられた。しかしベイカーはその不満ひとつひとつに対して何よりも重要な問題として扱った。やがて噂が広まった。「コーチが親身になってくれる」

一九六九年五月初め、二五歳の誕生日を迎える少し前、ベイカーはトレーニングとは関係なく疲労を感じるようになった。その二週間後には胸に痛みを覚え、その月の終わり頃のある朝、目が覚めたら脚の付け根がひどく腫れ上がっていた。

泌尿器科のエドワード・ジョンソン医師が診たところ、ベイカーの症状は深刻で、直ちに手術が必要だった。検査の結果、ジョンソン医師の懸念が的中した。ベイカーの片方の睾丸に癌腫瘍が発生し、その塊がすでに広がっていた。ジョンソン医師の予想では、ベイカーには言わなかったものの、手術をしても半年ほどの命だった。

手術に向けて自宅で静養していたベイカーは、自分に突きつけられた厳しい現実と向かい合った。もう走ることはできず、オリンピックの夢はついえた。指導者としてのキャリアも終わったことはほぼ間違いない。いやそれ以上に、家族に何カ月も苦しい思いをさせなければならなかった。

## 断崖の先端で

手術を受ける前の日曜日、ベイカーは一人で山へドライブに出かけた。外出は数時間に及んだ。その晩

家に戻ると、彼の気持ちに顕著な変化が現われていた。近頃消え失せていた彼本来の心からの微笑みが再び蘇ったのだ。その上、二週間ぶりに将来の計画について語った。その夜遅く、彼は姉妹のジルに、その晴れた六月の日に起きたことを説明した。

標高三千メートル余もある雄大なサンディア山の、アルバカーキの東の地平線を一望する頂まで車を走らせた。断崖の先端近くに車を停めて考えた。自分の病気で家族がどれだけ辛い思いをするか。いっそ、家族の苦しみと自分自身の苦しみを一瞬にして断ち切ってしまったら、とまで考えていた。彼は心の中で神に祈りをささげると、エンジンをふかし、サイドブレーキに手を伸ばした。そのとき突然、彼の脳裏に浮かんだものがあつた。どんな困難に直面しようとベストを尽くさなければいけない、と教えてきたアスペン小学校の子どもたちの顔だった。自分の自殺が彼らの心にどんな傷を残すだろうか。そう思うと、恥ずかしさがこみ上げてきた。彼はエンジンを止め、運転席にうなだれて泣き出した。しばらくすると恐怖心が消え失せ、気持ちが悪く落ち着いた。自分に残されたすべての時間をあの子たちのために使おう——彼はそう心に誓ったのだつた。

大手術と夏の間の静養を経て、九月に入るとベイカーは再び仕事に打ち込み始めた。すでに目いっぱいスケジュールに新たな決意を追加した。それは、障害者のスポーツ参加だった。障害の種類を問わず、それまで傍観者でしかなかった子どもたちが、今や「コーチの計時係」や「器具管理者」の役割を担うようになった。全員がアスペン小学校の公式のジャージを身につけ、頑張ればベイカー・コーチの敢闘賞リ

ボンももらえるのだ。彼は材料を自腹で購入し、夜、家に帰ってから自分でリボンを作っていたのだつた。

## 痛みをじつじつと

感謝祭の頃になると、ベイカーを称賛する手紙が生徒の親たちから毎日のようにアスペン小学校に届くようになった（その数は、一年足らずのうちに学校とベイカーの自宅両方合わせて五〇〇通以上にのぼつた）。ある母親の手紙にはこう書かれていた。「うちの息子は早起きが最大の苦手でした。起こして食事をさせ、家から送り出すまでもう一苦労だったのです。ところが、今では学校に行く時間が待ち切れないほどなんです。フィイルドの整備係をさせてもらったお陰だと思えます」

また、別の母親はこう書いた。「アスペン小学校にはスーパーマンがいると私の息子は言い張っていたのですが、私には信じられませんでした。それで、ベイカー・コーチが子どもたちとどんな接し方をされているのか、車でこっそり見に行きました。息子の言った通りでした」さらに、ある生徒の祖父母からこんな手紙が届いた。「私たちの孫娘は他の学校に通っていたときはなかなか溶け込めず、大変苦労しました。それに比べ、アスペンでのこの一年間は何と素晴らしかったことか。それもこれも、ベストを尽くしたと言つてベイカー・コーチが『A』を付けてくれたお陰です。内気な子どもにも自信を植えつけてくださったこの若い先生に、何とお礼を申し上げたらよいか」

一二月、ジョンソン医師による定期検診を受けた際、ベイカーは喉と頭に痛みがあると告げた。検査の結果、癌が首や脳に転移していることが判明した。医師はこの時、ベイカーが四ヶ月間もの間、激痛をじつと耐えてきたことを知った。走って疲れたときと同様、信じ難いほどの集中力でもって苦痛を追い払っ

ていたのだ。鎮痛剤の注射を打つことを医師は勧めた。だが、ベイカーは首を縦に振らなかった。「あの子どもを少しでも長く教えたいんです。注射を打つと反応が鈍るでしょうから」彼はそう答えた。ジョンソン医師は後にこう述べている。「あの時から私は、ジョン・ベイカーを実に私心のない人間だと思ふようになりました」

## 頑張った子にトロフィーを

翌七〇年初め、ベイカーはアルバカーキの小学生から高校生までの女子を対象とする小さな陸上クラブの指導を頼まれた。「デューク・シティー・ダッシュヤーズ」という名前のクラブだった。彼は即座にこの申し出を引き受けた。アスペンの子どもたちと同様、ダッシュヤーズの女の子たちも新コーチをとっても慕った。ある日、ベイカーは靴の箱を持って練習に現われた。そして、彼は宣言した。「この中には賞品が二つ入っている。一度も勝つたことがなくても頑張つて続ける子にあげるからね」ベイカーが箱を開けると、女の子たちは息を呑んだ。中には金色に光り輝くトロフィーが二つ入っていた。それからは、本当に頑張った子はこのようなカップをもらうこととなった。このトロフィーは彼が大会に参加して獲得したもので、彼の名前は丹念に削り取られていたことをベイカーの家族が気づくのは数カ月先のことである。

夏になると、デューク・シティー・ダッシュヤーズはニューメキシコや近隣の州で開かれた大会で記録を次々と更新し、侮れないチームに成長していた。ベイカーは「ダッシュヤーズはAAU（全米体育協会）のトップの全国大会まで行く」と誇らしげに大胆な予言をした。

だがその頃、また新たな問題がベイカーを苦しめるようになった。度重なる抗癌剤投与で彼はひどい吐き気を催し、食べてもすぐに吐いてしまうようになった。だが、どんどん弱っていく体力を振り絞ってダッシュヤーズの指導を続け、練習場を見下ろす小さな丘の上に座っていつも大きな声で励ました。

一〇月のある午後、眼下のトラックで女の子たちが何か大騒ぎしていたが、そのうちにその中の一人がベイカーのほうに丘を駆け上がった。「コーチ！」彼女は叫んだ。「コーチの予言、的中です！ 来月のセントルイスでのAAU決勝大会に招待されましたよ」

大喜びしたベイカーは「もう一つ夢ができた。頑張つて生き続け、子どもたちに同行するんだ」と友人たちに打ち明けている。

## 胸を張って堂々と歩く

だが、その夢はかなわなかった。一〇月二八日の朝、ベイカーはアスペン小学校の運動場で突然腹部に手を当てるや、そのまま地面に崩れ落ちた。検査の結果、広がっていた腫瘍が破裂し、シヨックを引き起こしたのだ。しかし、ベイカーは入院を断り、一日だけ学校に戻らせてほしいと訴えた。「絶望して地面に這いつくばるのではなく、胸を張って堂々と歩いている姿を子どもたちの脳裏に焼き付けたいんだ」彼は自分の両親にそう語っている。

大量輸血と鎮静剤の使用で支えられている今、セントルイス遠征は無理だとベイカーは思った。そこで、彼は毎晩ダッシュヤーズの子たちに電話をし、決勝大会ではベストを尽くすよう一人ひとりを励まし続けた。

一月二三日夕方、ベイカーは再び倒れた。救急車に乗せられたとき、ほとんど意識がない中で彼は両親に小声で言った。「灯かりはずっと点けておくように言ってほしい。堂々と近所を後にしたいから」と。

一月二六日夜が明けてまもなく、病院のベッドに横たわっていた彼は、自分の手を握っていた母親のほうに顔を向けてつぶやいた。「ごめん。いろいろと苦勞をかけてしまって」そういつてため息をもらすと、彼は目を閉じた。ジョン・ベイカーがジョンソン医師のもとを訪ねてから一八ヵ月後、一九七〇年の感謝祭の日のことだった。一年もの間、彼は屈することなく不治の病と闘ってきたのである。

二日後、セントルイスで開かれたAAU選手権で、デューク・ステイー・ダッシャーズは優勝を果たした。頬を伝う涙をこらえ、「ベイカー・コーチのために」という思いを胸に戦った結果だった。

ジョン・ベイカー自身に関する話はこれで終わりだが、彼の葬儀後に起きたことにも触れないわけにはいかないだろう。アスペン小学校の生徒の一部が自分たちの学校を「ジョン・ベイカー校」と呼び始めると、その動きはまるで野火のように広がった。それを機に、この新しい呼び名を正式名称にしようという運動が起こった。「これは僕たちの学校だ。ジョン・ベイカー校という名前にしたい」子どもたちは主張した。アスペン小学校の職員がこの問題をアルバカーキ教育委員会に付託し、委員会是有権者による投票を提案した。一九七一年初春、アスペン地区の五二〇家族が投票した結果は、賛成五二〇票、反対〇票であった。

その年の五月、ベイカーの数百人もの友人や生徒全員が出席した式典で、アスペン小学校は正式にジョン・ベイカー小学校と改称された。この学校は今や、この上ない苦境に直面しながら、残酷な現実を揺るぎない遺産に変えた勇氣ある若者を称える記念碑になっている。

ジョン・ベイカーが癌になったのは意図的なことではないが、それに対する対処法は間違いなく彼の選択の結果だった。彼は貢献を行なう道を選んだのだ。最後の力を振り絞って子どもたちの心と精神の育成に努め、彼が関わった子どもたちの人生に消えることのない遺産を残した。そして、そうした意味のある生き方をするることによって、彼も心の報酬を手にしたはずである。

ジョン・ベイカーと同様、メアリー・クラークも岐路に直面した一人だ。子どもたちは独り立ちし、夫とは離婚し、将来に対する希望を失った彼女は、受身的な「観客」であることに甘んじるだろうか。それとも、積極的に貢献する生き方を選ぶだろうか。

## アントニアが授かった使命

ゲイル・キャメロン・ウエスコット

メキシコのティファナにあるラメーサ刑務所で暴動が広がっていた。定員六〇〇名の収容所に二五〇〇名も詰め込まれ、業を煮やした囚人たちがビン割っては警官たちに投げつけた。警察は機関銃でこれに応戦した。

そんな大混乱の最中、衝撃的なシーンが出現した。こざつぱりした修道衣を身にまとった身長一六〇センチ足らずの小柄な女性が、単に和解を意味する仕草として両手を広げたまま静かに戦闘の中に割って入ったのだ。飛び交う銃弾やビンを気にかけることなく静かに立ち、全員に戦闘を止めるよう呼びかけた。意外にも、彼らはそれに従った。「シスター・アントニア以外、あんなことのできる人はいなかったでしょ